
祖父の見た風景

辻 史

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

祖父の見た風景

【Nコード】

N1919Y

【作者名】

辻 史

【あらすじ】

大好きな祖父が亡くなり落ち込む和奏が手に入れたのは、『絵の中に入る魔法』。それは画家であった祖父からの最後の贈り物だった。絵画の中での出会いを通して成長し、和奏が見つけるものとは

序章

祖父が亡くなった。

82歳、肺癌だった。

40年教師として学校に勤め、晩年は好きな日本画を描いて暮らした。

最期は祖父が自宅で家族と過ごす事を望み、皆に囲まれながら息を引き取った。私が知るのはたった17年間だったけど、祖父は幸せだったと思う。

祖父が好きだった。

高校生だった私は、初めて訪れる身近な死を半分受け入れられずにいた。

四十九日が済んだ晩、私はとても不思議な夢を見たのだった。

そこは様々な色で縁取られた空間であった。ただ、いくら目を凝らしてもぼんやりとして、何なのかよくわからない。どこからともなく降ってきたその声だけが、確かなものだった。

『こんにちは』

あなたは誰？

『私は×××』

え？何？

『あなたのおじいさんはね、生きている間にたくさんの良い行いをしたの。だから最後に一つ願い事が叶うのよ』

おじいちゃんは何を願ったの？

『貴女が絵の中に入れる魔法』

絵に入るの？

『素敵でしょう。でも三つだけルールがあるわ』
ルール？

『一つ目は、入れるのは全部で五回まで。二つ目は、絵の中の物は何も持ち帰れない』

三つ目は？

『入っている最中に絵が無くなったら、もう出て来れない』
怖いじゃない。

『じゃあこの能力はいらない？』

そういう訳じゃないけど。おじいちゃんは何でこの願い事をしたの？

『さあ。答えは貴女の中にしかないもの』

よくわかんないよ。あ、待って行かないで。

『さよなら、またどこかで会いましょう』

私、あなたを知ってる・・・？

最後の問いに答える事なく、その声は霞の様に消え去った。そしていくら呼び掛けても、もう返事が返って来る事は無かった。

1話

けたたましい目覚まし時計のアラームにより、心地よいまどろみから現実へと一気に引き戻された。

「・・・久しぶりにあの夢見たなあ」

ベッドの上で大きく伸びをする。季節は梅雨へと移り変わっていたが、今日はカーテンの隙間から清々しく晴れた空が窺える。

「うわ、今日は一限からドイツ語か。めんどくさっ」

手帳で時間割を確認して、何気なく開いた来月のカレンダーの20日に付いた丸印に目が止まる。

「もう、二年か」

祖父が亡くなつて今年で三回忌を迎える。当時、県内でも有名な進学校へと通つていた和奏^{わかな}は、何の疑問も無く皆と同じ様に厳しい受験戦争を経て大学へと進学した。

祖父に似たのか幼い頃から絵を描く事が好きで、高校も美術部に所属した。

しかし受験勉強が忙しくなるにつれ絵を描く時間も減っていき、進学と共に一人暮らしを始めると筆を取ることもなくなってしまった。

目まぐるしく過ぎて行く年月は様々な物を風化させていくのに、祖父の死というぽっかりと心に空いた穴は、そこだけ塞がることなくいつまでも開いたままになっていた。

「絵の中に入る魔法・・・か」

初めてその夢を見た時は本当に驚き、そして嬉しかった。だけど周りの皆は笑い飛ばすか心配するかで、誰一人信じる者はいなかった。

第一、実際に絵に入れた試しがない。初めの内は夢のお告げを信じて、有名と称されるたくさんの美術館に足を運んでみた。気に入

った絵画の前で祈ったり凝視したり触れてみたりもした。だが無情にも表面のガラスがひんやりとした感覚を指先に伝えるだけで、運が悪ければ警備員に注意される始末だ。

「おじいちゃん、お茶目でお調子者だったもんなー・・・」

あの夢がただの夢じゃなかったとしたら、祖父の最後の可愛い悪戯だったのか、そんな気もする。

大学生活は楽しい。新しい環境、講義、サークル、バイト。仲良くなった友人達。何かが足りないと思える心に気付かない振りをすれば、毎日はとても楽しい。

それに、来月は長い長い初めての夏休みだ。手帳に目を移すと、カラーペンとお気に入りのシールで縁取られた二週間が目に入る。「フランス・イタリア旅行かあ。海外なんて初めてだし、ホント楽しみ！」

手帳を閉じて、朝の身支度を始める。

この時の和奏はまだ、あの夢の魔法が実現する夏休みになろうとは、予想だにしていなかったのだった。

2話

「桜井。桜井和奏。いないか？」

「和奏！呼ばれてるよ！」

「ついつい膝の上に置いた冊子に集中してしまっていた様だ。」

「うえ！？はっ、ハイハイっ！来てます！出席です！」

「・・・一言言えばわかる。集中しなさい」

「すみません・・・」

「気付けば次の時限の講師が来ており、出席まで取り始めていた。反省しつつ、教えてくれた友人に感謝した。」

「さっきから集中して何読んでるの？」

「出席番号が隣のこの友人の名は佐々木千尋。同じ学部で同じサークル、そして夏休みの旅行のメンバーの一人でもある。」

「旅行のガイドブック。行きたい所いっぱいあってさ」

「あ、和奏の持ってるやつ、あたしと違う種類の本だ！イタリアの方見せて」

「いいよー」

「一つの事に集中してしまうと周りが見えなくなる性格だ。ガイドブックを見始めた時から気持ちは空の上だった。」

「行きたいところって、どこ？」

「千尋がイタリアのガイドブックを見ながら尋ねる。」

「フランスだったらルーブルとオルセーと・・・あとオランジェリーも行きたいなあ」

「全部美術館じゃん。絵とか好きだったの？」

「普段そのような素振りを見せた事が無かった為、意外そうに顔を上げて和奏を見た。」

「実はね。あ、イタリアだったらバチカン美術館も行きたいんだ。でもやっぱりオルセーにあるミレーの絵が見たいんだよね」

「ミレーって『落穂拾い』の？教科書とかに載ってるやつ？」

「そうそう。本命は『羊飼いの少女』だけだね」

「ふーん……。あたしは買物にグルメに」

「私も、そっちも!」

知らない内に、思わずキヤイキヤイ騒いであっていたようだ。気付けば目の前に教科書を持った講師が般若の様な顔で仁王立ちしていた。

「お前ら……。授業、聞けよ?」

「はっ、はいっ!」

和奏と千尋の声が揃った。

夏休みはもうすぐそこまで来ている。

3話

「花の都！パリだあー！」

美しい町並みに堂々たる風体でそびえ立つ凱旋門を前にして和奏は両手を挙げて叫んだ。

「ちよっ・・・和奏！恥ずかしい！」

待ちに待った大学生活初の夏休み、初の海外旅行。年に2、3回程度しかテニスを行わない飲み会メインのテニスサークルの、同級生4人で旅行を企画した。

一昨日の夜にフランス入りをして、昨日は『西洋の驚異』と称される世界遺産、モンサンミッシェルを観光した。そのため、今日が初めてのパリ中心部の観光となる。

「シャンゼリゼで買い物なんて・・・パリっ子？パリジエンヌ？夢みたい！」

上がるテンションを抑え切れず、走り出しそうな気持ちだった。

「凱旋門でコレなら、午後のお待ちかねのオルセー美術館行ったらどうなるのよ」

「死ねる！」

四人はデジタルカメラ片手にきらびやかな大通りへ繰り出した。

「ほー・・・凄い・・・」

オルセー美術館は予想以上の物だった。いくら注意しても口が開けっ放しになってしまう。横で見ている千尋も同じだった。

「ホント凄い・・・あたしでも知ってる絵が山ほどあるとは・・・」

マネ、ルノワール、モネ、ゴッホ、ロダン・・・目を見張る様な絵画ばかりが揃い踏みだ。

「和奏、二時間後に館内のカフェ集合だからね！忘れないでよ」

「はいはい、わかってるって」

（二時間じゃ全然足りないのになー・・・）

心の中でそうばやき、何が何でも見逃せないミレーの絵が集められたブースに足を運ぶ。

「・・・・・・・・」

本当に美しい物を見た時、人は言葉を失うらしい。

和奏は時の流れを忘れて立ち尽くした。

何分位そうしていたのか、和奏はふと小さな発見をした。

（そっか・・・！日本の美術館と違って、どの絵も表面にガラスがない！凄い！ナマの本当なんだあ！）

額縁の中のガラスが無いことで、光が反射せずに絵画を楽しむ事が可能だ。

和奏は待望していたミレーの『羊飼いの少女』の前で立ち尽くしていた。

（なんて素敵・・・吸い込まれそう）

羊の群れの傍らで、編み物をしている少女を描いたものだ。

心奪われるとはまさにこの事ぞ、と言わんばかりに鑑賞している。

しかし、マナーの悪い観光客とは世界中どこにでも存在するものだ。大声で笑いながら絵も見ずに喋りながら団体で歩いてくる。せつかく絵の世界に入り込んでいたのに、と近づく話し声にイラつきながら和奏は振り返った。

「ああっ！」

その集団は予想外に勢いよく和奏の方へと押し寄せていたのだった。咄嗟に身を庇ったのだが、衝突を避けられなかった。

勢いよく和奏は突き飛ばされてしまった。

（危ない・・・！）

立ち入り禁止線を越えて、それでも勢いは止まらず、大好きな『羊飼いの少女』との衝突は不可避なのか。

（ぶつかる！）

しかし和奏が恐れていた衝突はいつまでたっても起こらなかった。

4 話

「・・・ここは？」

一瞬意識が飛んだかと思ったら、次の瞬間には草原に投げ出されていた。一瞬の出来事で何が何だか分からず周りを見渡すと、そこには予想しない光景が広がっていた。

「な・・・にこれ。私、オルセー美術館にいたはず、よね？」

草原にはたくさんの羊の群れと、こちらを驚いて見つめるあどけない少女。

「ハ、ハロー・・・」

少女はポカンと口を半開きにしてこちらを見ている。

「ぼ、ぼんじゅーる？」

和奏の必死のフランス語に、少女は首をかしげるばかりだ。

（　　なにになになに？！いやいや、ちよつと落ち着こう。一体何が私の身に降りかかったのか。？大空襲によりパリの町は跡型もなくなった、そこで私だけが偶然奇跡的に生き残った。？ドラマやアニメでよくあるタイムスリップ。？宇宙人にさらわれて別の星に来てしまった。そこでアレはヒツジによく似た別の生き物。少女は凶悪な宇宙人）

和奏は頭を抱えてしゃがみ込む。どうやらどれも求めていた答えではなさそうだ。

（さてよ・・・あれは羊と少女。あの時私、見てた絵は、ミレーの『羊飼いの少女』。ということとは）

漫画の様に頭の中で電球が点灯した気がした。

「　　？おじいちゃんの魔法で、絵の中に入った！」

「ピンポン！！」

「うわあああ！誰！？」

「・・・大概失礼ねえ」

頭上から突如現れたのは、ピーーパンに出てくるあの有名な妖精

の様な意味不明な生き物だった。

「貴女が困ってそうだから助けに来たんじゃない」

「え？ そうなの？ ありがとう。 ってか、あなたもしかして、あの夢の声の人？」

「あら、よくわかったわね」

その羽の生えた小さい女性性は、和奏の周りをヒラヒラと飛び回る。

「知り合いかと思ったんだけどな。妖精だったの？」

「妖精は貴女が勝手に作りだしたイメージよ」

「じゃあやつぱり知り合い？」

「どうか」

気ままに飛ぶその妖精を見て、その答えは言ってくれなさそうな察しがついた。 要は考えろってことだろう。

「名前くらい教えてくれないの？」

「テキストに呼んだら？」

助けに来たって割には何も教えてくれないこの勝手な妖精に和奏は少しムツとした。

「じゃあポチ」

「は？！ 嫌よ。 犬じゃないんだし」

「ミケ。 タマ。 太郎。 次郎。 それから・・・」

「ああもう！ 性格悪いわね。 じゃあ『桜』って呼んでよ。 言っとくけど本当の名前じゃないからね。 桜の花が好きだからよ」

プイとして桜は飛んで行った。

5話

「ねえ、桜。桜ってば！」

「なーによ」

桜は和奏を気にせず自由気ままに飛び回る。

「何よじゃないよ。私、どうしたらいいの？どこ行ったらいいの？」
助けに来たって言う割には力になるうという様子はなく、仕方なく桜の後ろをついて行った。

「好きにしたらいいのよ。貴女が貰った魔法なんだから」

「そんな事言ったって」

「どこ行っても自由。何するも自由。始めに話したルールさえ破らなければね」

「自由か・・・」

和奏はふと考え込む。

（憧れのミレーの世界だけ・・・この知らない世界で知り合いもない中、私は何ができるのかな）

和奏を気にせず飛んでいた桜が、あつと声をあげて振り返った。

「置いてっていいの？」

「何を」

「アレ。額縁？」

桜が指差す方向を確認すると、額縁の枠だけが落ちているではないか。ちよつと和奏がこの世界に現れた辺りだ。

「アレをくぐって元の世界に帰るのよ？放って置いたら駄目じゃない」

「は？！聞いてないし！そうゆうのは早く言ってよ！」

「だから今言ったじゃない」

和奏は草原に無造作に置かれた重厚な金の額縁を拾い上げた。

「高そうな額縁・・・これをどうするの？」

「こつやって両手で持って、くぐればいいだけよ」

桜は得意顔で身振り手振り教えてくれた。

「こう?」

「そうそう。まずは頭を通して次に足を」

余りに自信満々に桜が話すから、和奏も合わせて同じ動作をする。

「えっ・・・わっ!？」

頭まで通すと、あとは吸い込まれるように枠の中に引きずられた。

額縁はドサリと音を立てて地面に投げ出され、そして和奏は草原から姿を消した。

「あーあ。もう帰っちゃった。ま、いつか。またすぐ会えるもんね」

桜は空高く舞い上がった。

「バイバイ」

そして光になって姿を消したのだった。

6話

「イタタタ・・・」

打ち付けた腰を擦りながら、和奏は辺りを見渡した。

（あれ・・・ここはオルセー美術館・・・だよな。そっか、私戻ってきたんだ）

大声を上げている迷惑な観光客の集団は、すでに5メートル程先を歩いている。そして目の前には、あのミレーの『羊飼いの少女』が何食わぬ顔で飾られている。

（何で入れたんだろう。今まで、どんな事しても絵の中に入れなかったのに・・・）

首をかしげながら、和奏は今までとは違った視点で穴があくほど絵画を凝視した。

その時、まさにピンと来た。

「そっか！ガラスだ！」

思わず口に出してしまい、慌てて口を両手で塞ぐ。

（この額縁は表面にガラスが無いんだ！日本じゃこんな事ってそうないもんね）

そう思うと、発見の喜びと同時に、日本に戻ったら魔法を使う機会が無くなってしまふという不安が募る。

こんな面白い魔法使わなきゃもつたいない、そう思い和奏は入口で貰った美術館の案内をパラパラ捲る。そこに紹介されている数々の作品から、一つの絵画に興味を引き付けられた。

（ゴッホの・・・自画像）

ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ。ポスト印象派の画家。生前売れた絵画はたった一枚だったという天才画家。自分で耳を切り落としたという奇行は非常に有名だ。

（この絵に入れば、ゴッホと会えるのね？）

不幸とも言える生涯をおくり、後に歴史に名を刻みつけたこの鬼才

が、何を思い何を絵に託したのか。例の魔法を使えば直接面と向かって話を聞く事が出来るのか。

（日本に帰っても使い道がないなら、使わなきゃもったいないよね）
迷いはなかった。決めたと同時に、和奏はゴッホの自画像に飛び込んでいた。

「おおーっと！」

またもや着地に失敗したらしい。

和奏の身体は時空を越えて今度も見慣れない世界へと飛び込んだようだ。

「ええと・・・ここは」

見渡しても黒というか青というか緑というか、複雑な暗くどんよりとした先の見えない光景だ。そしてなんだか狭い。窮屈なのだ。箱に閉じ込められている様な。

その不気味な世界に慄きながら、肝心の人物を捜す。

「あれ・・・どこに居るんだろ」

見渡せど薄暗く視界が悪い。しかし、ゴッホ本人に会わなければ来た意味がなくなってしまう。そんなので帰るわけにはいかない。

「§T
L

「わわっ！」

少し油断していた所に突然後ろから声をかけられ、心臓が飛び出すほど驚いた。

「うわああ！」

振り返って更に驚いたのはその眼差しだった。驚くほど真摯な瞳に見つめられ、しかし喋る言葉は分からず、和奏はもはやパニックだった。

「÷μ @」

「コマントレヴー？」

とりあえず行く途中に読んだガイドブックに載っていた基本フラン

ス語会話のページを思い出し、口にしてみる。

「セボーン！」

「%@ \$?」

そうだ、会話とは聞き取れない限り成立はしないのだ。

そのような当たり前の事を噛みしめながら、じりじりと近付いてくるゴッホに対し後ずさりするしかない。

「わかんないってば！嫌ー！！もうどうしたらいいのー！」

ほとほと困り果てた和奏は頭を抱えてしまった。

「桜！助けてよー！」

叫びは、この小さな世界にこだまして響いていった。

7話

「なによ、また来たの？」

半泣きで慌てふためく和奏の前に現れたのは、先程と変わらず小さな妖精の姿をした桜だった。

「た、助けてよー・・・」

ジリジリと迫るゴッホから逃げようと、和奏もジリジリと後退りしている。

一方桜は呆れ顔だ。溜息までついている。

「バカねえ。自画像に入るとか、作者の混沌とした精神世界に入り込む様なものじゃない。長く居いたら貴女の自我さえ危なくなるわよ」

しれつと末恐ろしい話を振られ、和奏は青ざめた。

「そうなの?!じゃあもう元の世界に帰らなきゃ!」

「ハイハイ、さっさと帰りなさい」

「あつ、そうか!」

額縁を指差され、和奏は急いで額縁に飛び込んだ。

(あつ・・・桜にお礼言つてない)

思った時には既に絵の中から去った後で、踏み止まるうにも逆らう事は叶わなかった。

気が付けば、ゴッホの自画像の前で派手に尻餅をついていた。

(あ、帰って来たんだ)

勿体ない魔法の使い方や悔やんでいると、何やら絵の前でひっくり返るおかしい東洋人がいると注目を集めてた。

(うわっ、めっちゃ見られてるし・・・)

いたたまれない気持ちになり、そそくさとその場を立ち去った。その時、チラリと見た腕時計は、友人達との待ち合わせ時間を既に2

0分超過しているではないか。

（マズイ・・・っ）

足早に待ち合わせ場所の館内のカフェに向かった。

「和奏、遅ーい」

「絶対遅れると思ってたけどねー」

「スミマセン・・・」

当然他の友人は皆、先に到着しており注文も済ませていた様だ。和奏も渡されたメニューを開く。

「和奏もゴッホの『自画像』見た？なんか引き込まれそうな力のあ
る絵だったよねー」

皆は先程から続いていたのだろう、印象的だった絵画の感想話を再開する。

（・・・引き込まれるどころじゃないし！危険よ危険！危な過ぎる
わ）

当たり前だが和奏の気も知らず、盛り上がる友人達の話は次の予定
であるオランジェリー美術館に移っていった。

（何だか嫌な予感がする・・・）

得体の知れぬ不安を払拭出来なかった。

8話

（危険な事もあるって解ってきたのに・・・）

入らずにはいられなかった。そこに存在したのは、ただただ青の光。

クロード・モネ。

印象派を代表するフランスの画家。別称『光の画家』。

和奏はオランジュリー美術館の2部屋を占める『睡蓮』の大壁画の前にして、衝動的に付き動かされ絵に入ってしまった。

「懲りないわねえ・・・貴女も」

「桜？」

不意に声を掛けられそちらに目をやるが、どうも輪郭がハッキリしない。

「なんか目が霞む・・・？」

「そりゃそうよ。そういう世界だもの」

何の事か分らず首を傾げる和奏に、桜は溜息について説明する。

「晩年のモネは失明寸前の白内障だったのよ。若い頃の作品と比べて、どんどん抽象的になってくでしょう。だから絵の中に入ったらそう見えるのよ」

「へえー。桜詳しいんだね」

和奏は感心したように頷いた。

「何脳天気な事言ってるの。貴女も入るならその位勉強しときなさいよ」

「だって別に評論家じゃないんだし、そんなの知らないよ。絵を見るのは好きだけど」

その言葉に桜が再び溜息を漏らした。

「あのねえ。それでもう三回も魔法使っちゃってるの。勿体くないの？」

「うーん。だって日本帰ってもどの作品もガラスに覆われてるし、

パリみたいに大作が身近にある訳じゃないし・・・」

確かに躊躇いもなく無駄遣いしてしまった気がする。でも日本では使えないんなら意味がない。まあ、今も入ってみて意味があるかと聞かれたら困るのだが。

悩む和奏を見て、桜は今日何度目かの溜息をついた。

「・・・本当は自分で気付いて欲しかったんだけど」

「何を？」

和奏には何の話かさっぱりだ。

「貴女のすぐ側にあるでしょう。額縁からいつでも出せる、貴女の大好きな絵がたくさん」

盲点とはこの事が。

頭を殴られた様な衝撃だった。本当に、身近にありすぎて気付けなかった。

「おじいちゃんの、絵」

「遅いわよ」

飽きるほど眺めて、色使いも鮮明に記憶している。

日本画が中心の祖父の作品の数々。

（魔法をくれた神様が、魔法の使い道が分からなかった私に呆れてないのなら・・・）

今度は、尊敬して止まない祖父の絵の中に。

9話

晩年の祖父は、奈良県の片田舎で長男夫婦と同居をしていた。和奏の叔父と叔母にあたる人物だ。彼らには和奏の三歳年上の一人息子がいて、幼い頃は実の兄妹の様に育った。そんな理由もあつてか、和奏を実の娘の様に可愛がつてくれていた。だから今回の夏休みの突然の帰省にも喜んで迎えてくれた。

「遠い所、よう来たねえ。はよ上がり。冷たい麦茶入れるわ。部屋に荷物置いてき」

笑顔で出迎えてくれたのは叔母だ。

「ありがとう！ねえ、篤志くんは？」

「ちょうど昨日から帰ってるんよ。離れにおつたと思うわ」

和奏も幼い頃、この地元でも有名な大きい屋敷に住んでいた。祖父に叔父一家、和奏の家族、三世帯が生活しても十分な広さがあつた。和奏は父親の転勤の為に神奈川に引っ越した後も、こうして長期休暇の度に遊びにやって来ているのだった。

「篤志くん、いる？」

和奏は叔母の入れた二人分の麦茶ときな粉の団子に乗せた盆を持って離れにやって来た。

きな粉の団子はこぢんまりとした地元の店の物で、和奏の好物だ。昨日帰省の連絡をしたばかりなのに、今朝わざわざ買いに行ってくれた様だ。

「おるで。久しぶりやなあ。大学はどうなん？和奏も一人暮らしやる」

「そうだよ。こないだ友達とヨーロッパ行つたの。後で写真見せる

ね！お土産もあるし」

従兄弟の篤志は美大の四年生で今は大阪に住んでいる。祖父が絵を描いていたこの離れを、今は篤志がアトリエとして引き継いだらしい。

「ホンマに？めっちゃいいやん。あ、俺も見せたいモンあるわ。ちよつと待つてな、取ってくるから」

言つて篤志は離れを出て行つてしまった。

「なんだろ？まあいつか。その間におじいちゃんの絵を見てよーつと」

離れの奥の部屋には祖父の絵が保管されている。それが今回の帰省の一番の目的だった。

「やっぱり、いいなあ」

パリやローマでたくさん世界的に有名な絵画を見てきた筈なのに、やはり自分の好きな絵はここにあると実感する。

田んぼに降り積もった一面の雪景色、水しぶきが飛んで来そうな滝、赤富士、深い緑の山道。そのどれもが鮮やかで、見る者に空気や二オイまで感じさせてしまう程だ。

「どの絵に入ろうかな・・・」

魔法はパリで三回使つてしまったから、残されるはあと二回。選ぶにも慎重になった。

「富士山に出ちやつても困るしなあ。雪景色は寒いでしょ。だったら・・・」

じっくり考え込んでいたためか、和奏はその異変に気付くのが遅くなつてしまった。

「あれ・・・？なんか、焦げ臭い？」

嗅覚を刺激する不快な臭いを不審に思い、部屋の扉を開ける。

「な・・・何これ・・・」

目に映るのはまさに映画の様な火の海だった。

「火事・・・！篤志くん！」

だが先程出て行つた篤志はまだ戻つて来ない。

「誰か！」

助けを呼んでも声は誰にも届かない。

それどころか、炎の勢いは増して和奏に迫り来るではないか。

（煙を・・・避けないと）

両手で口元を押さえて回りを見渡すが、不運にも唯一の窓には格子がはめられていた。

とりあえず急いで窓を開けるが、逃げ道にはならない。次第に眩暈を覚える。

（頭がクラクラする・・・。このままじゃ焼け死ぬか一酸化炭素中毒に・・・）

初めて身近に迫る死の存在感。

（嫌だ・・・）

恐怖で身体が震え出した。

『こつち』

突然誰かに呼ばれた様な気がして、驚き振り返る。そこにあったのは一枚の秋の風景。

無我夢中だった。

考えるより先に、和奏は絵の中に飛び込んでいた。

10話

おじいちゃん、夏休みの宿題の絵で金賞取ったの！
『えらいなあ、よう頑張った。冬休みに見せてな』

おじいちゃん。私、美術部入ったのよ。

『そうか。わかちゃんは昔から絵が上手だったね』

来月に文化祭があるの。私、絵を出すんだよ。

『そうなんや。見に行きたいけど、ちよつと体調がなあ。写真、送
つてくれへん？』

この翌年の文化祭には、祖父はもうこの世にはいなかった。

「さん、お嬢さん。大丈夫ですか」

「わあっ」

和奏は長い長い夢から突然現実へと引き戻された。

「イタタ・・・」

飛び起きた反動か、激しい頭痛に襲われる。

（ そうだ。奈良に帰省して、それから火事で）

額を押さえ、働かない頭に鞭打つ。

「あのー・・・大丈夫ですか？」

「わわっ」

隣で覗き込む男性の存在に初めて気付き声を上げる。

「篤志くん？ いや、似てるけど違う」

青年は従兄弟の篤志に良く似た面影があり歳も近かったが、全くの別人である。

「篤志？私は新介と言います。桜井新介、美術の教師です」

（まさか）

ぼんやりとした頭が一気に冴え渡る。

「おじいちゃん?!」

新介はおじいちゃんと呼ばれ、ポカンとした後、人の良さそうな笑顔で笑い出した。

「おじいちゃん、とは驚きました。残念ながら、まだ『お父さん』です」

「あ……。ごめんなさい。男の子が二人いるんだよね？おばあ・・・奥さんは？」

「え、はい。よく知っていますね。でも妻は去年死にました。身体の弱い人でしたからね」

「……。すみません」

「あ、いえ！そんな謝られることやないんです」

詫びられて逆に慌ててしまい、お茶を汲んできますと言いその場を離れた。

自分の知る祖父とは随分印象が違う。声も顔も若く、かなりの優男にも見える。恐らく和奏の知る祖父とは半世紀程違うのだろう、当たり前と言えば当たり前だ。

「桜？いるんでしょう？」

新介に聞こえないように小声で呼んでみた。

「ここよ」

聞き覚えのあるその声はタンスの上から聞こえてきた。

「よかった、桜がいてくれたら心強いよ。ここっておじいちゃんの絵の中だよね」

桜を見つけてホッとする和奏とは対照的に、桜は深刻な表情を崩さない。

「桜？」

「……。貴女、状況を分かってる？」

「え？何の事？」

和奏には今までのミレーやゴッホ、モネの絵画の中に入った事と変わらないつもりだ。

「火事で燃えたのよ。入ってきた絵が！」

「ウソ・・・」

「最初の約束を、覚えているでしょう。この世界のルールを」

『入っている最中に絵が無くなったら、もう出て来れない』

「　　嘘。そんなの嘘だ！」

和奏は叫んで、表に飛び出した。

11話

自分がくぐって来たはずの額縁を探しに、和奏は日が暮れるまでこの山あいの村を歩き回った。

しかし、何処を探してもそれらしい物は何一つ見つからない。

ようやく日が沈みきった頃、嫌でも頭が現実へと向き合わされるようになる。

（もう、本当に帰れないのかな・・・）

元の世界で火事から逃れられても、戻れなくなるなんて考えてもみなかった。

（どうすればいいの・・・こんな所で一生を過ごすの？第一ここはいつ、どこなのよ！）

感情的になる自分に、どこか冷静な自分が答えを出す。

（お父さん達が生まれてるから、第二次世界大戦後の奈良、を描いた絵の中だよ。1950年代、いや60年代？）

散々泣きながら放浪したから、今はもう涙は涸れて溜息しか出ない。

ほのかな電灯の元、田んぼに囲まれた細い畦道にしゃがみ込んだ。

肌寒く辺りは暗い。どんどん寂しい気持ち募ってくる。

両親や友人、従兄弟の篤志、元の世界が次々と浮かんできた。

「心配してるかなあ」

「心配しましたよ！」

「わあっ！」

和奏は危うく腰を抜かす所であった。振り返れば、片手に明かりを持った新介が、もう肌寒い季節だというのに汗だくになって息を切らしていた。

「どこ行ってたんですか。こんなに遅くまで！そんな薄着で！」

「う、ごめんなさい」

必死の形相に圧倒され、ついつい謝ってしまう。しかし新介は着ていた上着を和奏に掛けると、そのまま横にドシリと座り込んだ。

「まあ無事でよかったですよ。ええと、名前は・・・」

「あ、和奏。桜井和奏」

新介はそれを聞いて、二児の父親とは思えない様な、少年の顔で笑った。

「同じ桜井ですね」

（・・・そりやそうなんだけど）

「『わかな』は、こうですか？」

新介は手頃な木の枝を拾うと、地面に『若菜』と書いて見せた。

「違うよ。こう」

和奏は、新介の字の横に並べて『和奏』と記した。

「平和を奏でる。いい名前ですね」

「あ・・・お父さんに名前の由来聞いた時も、同じ事言ってた。戦争の無い世界で、私にしか出来ない何かで平和を奏でてみなさいって」

「素敵なお父さんじゃないですか」

（・・・あなたの息子なんだけどな）

思うが、口には出さなかった。

「じゃあ、わかちゃん。お話は沢山したいのですが、冷えるといけませんのでそろそろ帰りましょうか」

「うん・・・」

新介は立ち上がり、和奏に手を差し延べる。

手を引かれて歩く砂利道は、かつて幼い時代に祖父と歩いた奈良・吉野の山道が思い起こされ、和奏の目の奥を熱くするのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1919y/>

祖父の見た風景

2011年12月5日20時53分発行